二、幕府登用

幕府の役人となる

天保十三年(一八四二)金次郎が五十六歳のとき、 江戸幕府の老中、 水野越前守忠邦にとつぜん

呼び出され、 幕府 の役人にとりたてられることになりました。

最初 この仕事は利根川ぞいの印旛沼 (千葉県)から東京湾へ分水路を作る測量調査の一員になる

ことでした。

次郎 幕府は何度もためしてみましたが、うまくいばでふ 利で安全な水路ができることにもなるので期待されていました。しかし、この計画をこれまでにも の海(東京湾)に落とすしかなく、うまくいくと房総半島を回って江戸の海を通る船にとって、便 りの村々の田 利根川は、 は、 今までの各地の仕法の中で、 大雨 畑が水びたしになることが多くありました。これを防ぐためには、 のあとなど水がふえると印旛沼に水を逆流させるため、沼がはんらんして、 いろいろの水路土木工事を経験していましたが、 かないので金次郎にやらせようと考えたのでした。 印旛沼の水を江戸 今回はとて まわ

も大きな工事でした。

てもらう必要があること、また、十四万両あれば各村の立て直しをはかりながら行っていくことが 必要があると考えました。分水工事を行うことは、その通路となる村々の人の心をつかんで協力し 金次郎は、 大変な工事であることから、急ぐことはない、まずまわりのまずしい村々を立て直す

を使いましたがむだになり、 きょく、この工事は今までのやり方で行い、水野忠邦が政治からしりぞいたこともあり二十五万両 できると考えました。 ところが、この工事を急いでいる幕府には、この計画を受け入れてもらえませんでした。 とちゅうで終わってしまいました。 けっ

金次郎は幕府の役人にはなりましたが、これといった仕事も与えられず、力をふるうこともでき

7、つらいときを過ごしていました。

(「そんとく」とは、のちの人びとが呼ぶようになりました。) なお金次郎は幕府の役人になってから「尊徳」という侍らしい名のりをするようになりました。

仕法ひな形の完成

ました。待望の仕事を得て喜んだかれは、すぐ日光に出発する とを考えました。仕法のひな形づくりには、長男の弥太郎をふ でも実施でき、どの土地にもあてはまる仕法のひな形を作るこ 理だからでした。そこで尊徳は自分の手をはなれても、 地を使えるようにする計画を立てるように、という命令をうけ いと断りました。 つもりでした。 (計画書) を出すようにというのです。 弘化元年(一八四四)四月に、尊徳は日光御神領の荒れた土 ところが幕府は、現地を見ないですぐに見込書 それは実際の土地を見ないで立案するのは 尊徳はすぐにはできな だれに 無

涯の大事業となり 月後のことでその部数は して作られた仕法の手本となる書で、後に多くの人びとに伝え 全精力をかたむけた仕法のひな形が完成したのは、二年三ヶ ました。 八十四冊にもなり、 このひな形は、尊徳の体験をもとに かれにとっては生

くめて門人たち二十人をこえる人びとが協力しました。



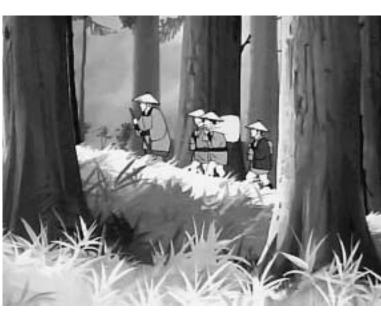
天がりょう 鳥山藩の仕法、下館藩の仕法、それに新たに始まった相からすやま 郷 徳一家は近くの東郷陣屋 たのです。 役人たちの中には、 を禁じ、 れました。その上に、 もうしわけ られました。 (福島県) 嘉永元年 四六)七月、 陣屋に移ってから、 (将軍が直接おさめる領地) の仕法が命ぜられたからで 郷里の墓参りさえも許されなくなりました。 の仕法、 ない 尊徳は、 (一八四八) 九月、 しかし、 かれの元に突然小田原藩の仕法中 ۲, その上東郷村をはじめとする十 尊徳の考えを十分理解していない人も 忠真公の心におこたえすることができず 忠真公のお墓の前で涙を流 尊徳が小田原領民と行き来すること 尊徳の身辺はまた忙しくなりました。 ひな形が完成した直後、 (栃木県真岡市) 住みなれた桜町 に 移 をあ 弘化三年(一 りました。 しました。 止が伝えら どに、 四 か 馬藩 村 藩 尊 \mathcal{O} 東

尊徳の死

九十一か村、二万石あまりのとても広い土地で、その四分の一が荒れ地でした。 嘉永六年 (一八五三) ついに日光仕法を実際に進める命令がくだりました。ここ日光御神領は、

このころ、六十七さいの尊徳は大きな病気にかかってしま

がい、今は大ぜいの門人がいて、息子の弥太郎も十分に仕事 ことなど、弥太郎を中心にして仕法は進みました。 こと、よい行いをした者を表彰すること、荒れ地を開墾する ができるし、仕法のひな形もあります。まずしい百姓を救う かれの病気は再発してしまいました。しかしこれまでとはち ず、足を運んでいきました。このような無理がたたってか、 かなければ実際の様子が分からないといって駕籠にものら 尊徳にとってたえられないほどであったと思われますが、歩 村を回りました。ここは山が多く、平らな土地ではありませ いました。しかし、少し病気が良くなったので日光に来て、 しかも七月には真夏の太陽が照りつけています。 安政二年 病後の





東 郷からここに移りましたが、尊徳の病状は思わしくあ ませんでした。 (一八五五)四月、今市に報徳役所ができると、尊徳一家は

しなさい。」と遺言したといわれています。 で「決して、ことを急いではいけない。決してあきらめては そのそばに松か杉を一本植えておけばよい。必ずこのように た尊徳は「自分が死んだら墓石などを立てずに土をもり上げ、 ている仕法がうまくいくかどうか心配だったのでしょう。 いけない。」と教えました。今、日光をはじめ、各地で行われ 尊徳は病がいよいよ重くなった時、門人たちを枕元に呼ん ま

の生涯を閉じました。 そして、安政三年(一八五六)十月二十日に今市で七十年

で続けられました。 ました。一方、 門人たちは、これほどの先生の墓がないのは「申しわけない」「さびしい」ということで墓をたて 日光御神領はじめ各地の仕法は、弥太郎や門人によって受け継がれて明治になるま また、 | 尊徳の生き方、考え方は今の世の中でも人びとの心の支えとなり大切に

されています。

尊徳の教え



||宮尊徳「回村の像」

せきしょういだい積小為大

いちえんゅうごう

IJ 温度、日光、種の生命力などがとけて一つになっていく。 ず、次の形や新しい形になってあらわれてくる。そのためには、いくつかのもの なり花を開き、 イクルがえい遠にくり返されている。たとえば、 という。そして、生命あるものはいつかは死に、また、生まれてくるといったサ わせて一つの円とし、 き合い一体となっている。だから決して切り離して考えるのではなく、両方を合 と結びつき、 尊徳のものの見方、考え方は、この世の中で相対するものはすべてが互いに働いる。 やがてまた芽を出す。このように世の中のものは、そのままの姿でとどまら あるいはとけ合っている。たとえば種が草になるには、 実を結ぶ。 一つの円の中に入れてみるというもので、これを「一円観 その花もやがてはかれ、土に帰る。 植物は種をまけば、やがて草と これを一円融合という。 そしてその種が残 水や養分や

とをおろそかにするものは大きなことなどなせるわけがない、小さなことをおこ に目がいくけれども、 行うことが大切である。とかく人間は、小さいことをきらい、大きなことばかり くという教え。大きなことをなしとげるには、まず、小さいことをおこたらず、 たらず積む努力をしなければならないという尊徳の教え。 小さな努力をこつこつと積み重ねていけば、 大きなことは本来小さなことの積み重ねであり、 いずれは大きな収穫や力に結びつ 小さいこ

この一円融合することが大切であると教えている。

勤

分労

尊徳仕法の三つの実せん力

「勤労」とは働くことであるが、人間にとって、身をもって働くことが大切で、

ためだけに働くのでは本当の勤労ではない。 必要なものをいくらでも得ることができる。しかし何かを得るため、手に入れる 受けた恩徳にお返しするために、 自

分の徳を生かして働くことが大切である。そのような働きが人間を向上させるこ

とにつながると尊徳は教えた。

済上の分度は一けんの家だけでなく、一つの村や町、県や国、一つの会社 応じた一定の基準(分度)を決め、その中で生活する必要せいを説いた。この経 どについても大切なことである。 などにもあてはまる。又、分度は経済面だけでなく健康、 収入が少ないのに、 は枝をのび放題にしておけば、やがて、根がおとろえかれてしまう。同じように まえ、それにふさわしい生活を送ることが大切であるという教え。 人には、決まった収入がある。それぞれの人がその置かれた状況や立場をわき 派手な生活をすれば、やがて生活もくずれてしまう。 体力、 あるいは開 はち植えの松 収入に の経済 発な

ど度

ふん

分

推譲

とをいう。

人間は譲り合うことで初めて人間らしい生活ができると説いた。

推譲

ために貯えたり(自譲)、他の人や社会のためにゆずったり(他譲)する行為のこ うになった。また、将来に向けて、自分の生活の中であまったお金を家族や家の があるかないかである、と教えた。この「譲る」ということを「推譲」と呼ぶよ を将来のために残す (譲る)。あるいは人のため、世のために譲ることが人間 いとして大切なことである。人間と、けだものの違いはこの「譲る」ということ 尊徳は 「譲る」ということをたいへん大切に考えた。分度を立てて余ったもの

を貸すこと、 の精神が人間に平和と幸せをもたらすと教えた。 「道を譲ること」「席を譲ること」も推譲であるし、「力を譲ること」つまり、 手助けすること、ボランティア活動、 推譲とは、 奉仕活動なども推譲の一つで 物やお金だけでなく 力 - 43 -

ある。

には「至誠」といって真心がともなうことも大切なことです。 以 上の「勤労」「分度」「推譲」は、三つがそれぞれが結び合うことが大切です。また、この三つ

	西暦 年	年号 年	年齢	主 な で き ご と
桜町立て直しの時代	1822	文政 5	36	小田原藩に登用(名主役格)。 桜町領の立て直しを命じられる。
	23	6	37	田畑・家財を売りはらい、桜町に引っこす。立て直しが始まる。
	24	7	38	長女文子誕生。
	28	11	42	桜町で反対や妨害を受け、苦しい日々を送る。
	29	12	43	成田山で断食修行をする。帰ってからは、事業が円満に進行する。
	33	天保 4	47	凶作を予知して対さくをする。
	35	6	49	谷田部藩の立て直しを始める。
仕法が広まる時代	36	7	50	諸国大凶作(天保のききん) 烏山藩を救急援助。
				桜町領の立て直しが終わる。
	37	8	51	小田原領のうえた人々を救う。
				大久保忠真病気で亡くなる。
				烏山領の立て直しを始める。
	38	9	52	小田原領・下館領の立て直しを始める。
	41	12	55	桜町で谷田部茂木・下館・小田原領などを始め多くの藩や領の指導を続ける。
	42	13	56	幕府の役人になる。利根川分水路測量調査をする。
	43	14	57	尊徳と名乗る。
	45	2	59	相馬藩の農村の立て直しが始まる。
日光立て直しの時代	46	弘化 3	60	日光仕法のひな形完成。
				小田原藩の仕法を打ち切られる。
	53	嘉永6	67	日光領の立て直しを頼まれる。
				江戸で発病する。
代	56	安政 3	70	10月20日、今市で亡くなる。

注1 年れいは、当時のならわしによる数え年で示してある。 注2 名は「金治郎」であったが、34~35歳のころから小田原藩で「金次郎」と書くようになった。

二宮金次郎の一生

	西暦 年	年号 年	年齢	主 な で き ご と
幸福な時代	1783	天明 3		浅間山大ふん火。
				天明のききんが始まる。
	87	7	1	7月23日 栢山村に生まれる。金治郎と名づけられる。
	1790	寛政 2	4	弟友吉(のちの三郎左衛門)が生まれる。
	91	3	5	酒匂川がはんらんし、田畑の大部分が流出する。
	96	8	10	大久保忠真が小田原藩主になる。
	98	10	12	父利右衛門が病気で倒れ、医師村田道仙にかかる。
				父に代わり酒匂川の土手の工事で働く。わらじを作り工事の大人に使ってもらう。
家	99	11	13	松苗を200本を買い、酒匂川の土手に植える。
難				弟富次郎が生まれる。
家苦難の時代	1800	12	14	9月 父利右衛門が亡くなる。
'	1	享和元	15	貧乏のどん底生活を味わう。年末の用意もできない。
	2	2	16	母よしが亡くなる。
				酒匂川の洪水。
				金治郎は、おじ万兵衛に、弟たちは母の実家に引き取られる。
一家立	3	3	17	菜種をしゅうかくする。捨て苗から米1俵を得て「積小為大」をさとる。
	4	文化元	18	万兵衛方を去り、名主岡部方に出入りする。
	5	2	19	二宮七左衛門方に住み込む。荒れ田を復旧し耕作を進める。
	6	3	20	生家の近くに小屋を建てて住み独り立ちする。田地 9 元 あまりを買いもどす。
一古	7	4	21	弟富次郎が亡くなる。
家立て直しの時代				米、金の貸付や小作米の収入がふえる。
時代	8	5	22	母の実家川久保家にえんじょをする。 このころ俳句をたしなむ
	1810	7	24	田地が1 46%となる。江戸・伊勢・関西旅行をする。
	11	8	25	学問のための本を買い入れる。
				小田原藩家老服部家の若党になり、息子の教育係などをつとめる。
	14	11	28	服部家の使用人を中心に「五常講」を作る。
	17	14	31	2月 中島きのと結婚。 田地が3 8分あまりとなる
隣	18	文政元	32	服部家の立て直しを引き受ける。
救				11月 藩主忠真から表彰される。
隣人救助時代	19	2	33	長男徳太郎が誕生。まもなく死亡。3月にきのと離婚する。
	1820	3	34	4月 岡田波子と結婚。
				年貢のますの改良がとりいれられる。藩士の五常講を作る。
	21	4	35	弥太郎誕生。

読者のみなさんへ

も 命働き、夜は、自分で育てた菜種からとれた油で火をともし、その明かりで遅くまで勉強をしました。 小田原市で生まれた私たちの大先輩です。若くして両親を亡くしましたが、大人に混じって一生懸 薪を背負って本を読む二宮金次郎の像を見たことのある人はたくさんいると思います。 青年時代には独創的な考えで人手に渡った田畑を買い戻し、一家を立て直し、大人になってから 関東を中心に各地の救済や開発に力を尽くしました。

てほしいと思います。 言ったり行ったりしたものです。この本から金次郎の人柄や行動を学び、皆さんの豊かでたくまし れています。それがまるでドラマのような事柄でも、すべてが金次郎の言葉、行動として実際にれています。それがまるでドラマのような事柄でも、すべてが金次郎の言葉、行動として実際に に」をもとに小学生の皆さんに読みやすく作り直したものです。ひとつひとつが史実に忠実に書か い生き方に活かして頂きたいと思います。そして、私たち小田原の生んだ偉人として心の中に留め その二宮金次郎について書かれたこの物語は、すでに刊行されている「二宮尊徳 青少年のため

平成十七年三月

小田原市教育委員会教育長 江島 紘

参考資料

||宮尊徳 二宮尊徳百二十周年祭記念事業会

||宮金次郎 和田 傳 童話屋

高田 稔

二宮金次郎 木暮正夫

ポプラ社 栃木県二宮町

尊徳物語

ビデオ「二宮金次郎」

絵

監修

報德博物館館長代理

小田原市教育委員会 (尊徳記念館

斎藤清一 郎

二宮尊徳読み物資料の作成に関する研究員

副委員長 委員長

久保寺 宮内

守 (小田原市立豊川小学校教諭)

仁 (小田原市立千代小学校教諭)

久美子 (小田原市立桜井小学校教諭)

登美江 (小田原市立東富水小学校教諭)

稲葉

廣澤

所員

指導主事

石井 下澤

政道

新版

二宮金次郎物語

教育研究所長

研修相談員

俊昌

印 発 行 者

初版発行日 第二版発行日 電話 小田原市教育研究所 小田原市荻窪三〇〇 平成十八年九月一日 平成十七年三月三十一日 〇四六五(三三)|七二七

所長 ㈱アルファ 郁夫

頒価200円 (本体191円/税9円)

語

小

